

キャンパスレポーターが行く!



第9回*教育福祉科学部 生活・技術教育

** 大野 歩准教授プロフィール **



氏 名：大野 歩 (オオノ アユミ)
所 属：大分大学教育福祉科学部
生活・技術教育
専 門：保育学、幼児教育学

最終学歴：広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻
博士課程後期 満期単位取得退学

主な研究：スウェーデンの保育改革、子ども理解と保育評価、
子育て支援

今回のキャンパスレポーターは大分舞鶴高校OBで教育福祉科学部2年の堤未生さん。

そして、後輩の大分舞鶴高校2年生の佐藤日菜さん、首藤里緒さんです。

教育福祉科学部 大野歩准教授の研究室を訪問してインタビューしました。

どんなことを研究しているんですか?

堤：私たち3人がキャンパスレポーターとして、前半に先生のお仕事について、後半に先生個人のことについてインタビューさせていただきます。よろしくをお願いします。

まず先生のお仕事について質問がある方はどうぞ。

佐藤：先生の所属されている教育福祉科学部はどのような学部ですか。

大野：教育福祉科学部は、その名のとおり、教育と福祉を融合させた学部です。学校の先生になりたいというような教育学に関心のある学生と、心理士

などを目指すような社会福祉や心理学に関心のある学生とが両方在籍して、一緒に学んでいます。来年度からは、教育学部と福祉健康科学部にそれぞれ再編されます。



佐藤：今までは教育福祉科学部という一つの学部だったのに、分けた理由は何がありますか。

大野：今、地方の大学には、地域のニーズに応えられる、地域社会に貢献する人材の育成が強く求められています。そのため、大分大学では大分県の地域課題により応じた大学教育の改革をすることになりました。教育学部は地域の教育に貢献する教員、特に小学校教員の養成を主目的とした学部生まれ変わります。福祉健康科学部は、社会福祉学や心理学にリハビリテーションを新たに加えて、各分野の専門職の養成を目指す学部になります。どちらも、専門的により深く学べるような態勢をつくらうということで、二つに分かれるんですね。

首藤：先生は今、主にどのような研究をされていますか。

大野：私の専門は、「保育学」と「幼児教育学」です。年齢の小さな子どもたち、特に、小学校に上がる前の子どもたちが、どうすればその子らしくのびのび育ってくれるかとか、そういう子どもたちを周りの大人がどういうふうにつけて支えていったらいいのかということの研究をしています。中でも、スウェーデンの保育をずっと研究していて、日本の保育と比較しながら、子どもたちの育ちについて考えています。

首藤：スウェーデンの保育の中で、日本に足りない教

育を取り入れるとしたらどんなことがありますか。

大野：私は「日本に何が足りないか」という視点でスウェーデンを見ているわけではないのね。なぜかという、日本には日本独自の保育があるし、スウェーデンにはスウェーデンの、他の国もそれぞれ自分の国の考え方に沿った保育があるの。じゃあ、なぜ、私がスウェーデンの研究をしているかという、例えば日本には、2006年から幼稚園と保育所の機能を持ち合わせたこども園という就学前施設ができました。スウェーデンでは、1972年に保育所と幼稚園を一つにした就学前学校というのをつくって40年以上続いているんですね。その過程でいろいろな問題が起こったり、解決法を考えたりしてきたの。そういうスウェーデンの姿を見ながら、日本の子どもたちにとって1番いいのはどういう環境をつくるのか、そのためにこれから何ができるのかということを考えます。異文化を見ることで日本の保育がより分かってくるというところかな。

首藤：スウェーデンと日本の保育施設で、何か違うところがありますか。

大野：たくさんあるんだけど。まず、一番違うのは先生と子どもの数の違いかな。1クラスに子どもが15人ぐらいと先生が3人います。1人の先生が見る子どもの数が日本に比べたら圧倒的に少ない。だから、保育の質がいいと言われていたところがあります。それだけではないんですけどね。あとは、子ども自身がどういう考えを持っているかということ、小さな年齢の時からとても大切にされていて、例えば2歳の子どもに対して「あなたの考えは？」とか「あなたはどうしたいの？」ということ、必ず尋ねるところも大きな違いかな。

きっかけは？

佐藤：先生が大学の先生になろうと思ったきっかけは何ですか。

大野：大学の先生になろうと思ったことはなくて、研究

ができる仕事に就きたかったの。小学校1年生の時に『恐竜と化石のひみつ』という本にはまって、そこから、博物館で働く人になりたいって、ずっと憧れてたの。もう一つは、高校生になって自分の進路を考えている時にちょうど出会ったのが『民族の世界』という本。すごく面白いなと思って、書いた人は何をしている人だろうと見てみたら、文化人類学の先生だった。それで、大学に行って文化人類学を勉強して、気がついたら、なぜか保育とか幼児教育の研究をしているのね。恐竜の化石を掘ってみたいから始まり、博物館で働きたいとか、いろんな国の文化を調べたりする人になりたいとか、それを追いかけて行って、自分なりにやれることをやっていたら、今に行き着いたというかたちかな。

佐藤：文化人類学ってどういうものなんですか？

大野：いろんな民族の生活様式や習慣やものの考え方を研究することで、自分と他者との違いに気がついたり、なぜ違うのかという問いを抱いたりしながら、人間とは何かということを考える学問だと思います。そういうところから、私は福祉制度が整っているといわれるスウェーデンで大切にされているものの考え方を知りたいなと思って、特に小さな子どもと関わる部分を調べていくうちに保育学や幼児教育学の研究をすることになりました。

趣味はなんですか？

首藤：先生の趣味は何ですか。

大野：映画を見ること。NBAの試合を見るのも大好き。大分のいろんなところを知りたくて、あちこち回ったり。温泉も楽しんでますよ。

大野：みなさんは、どうしてキャンパスレポーターを試してみようと思ったの？

佐藤：私は教育学部に入りたいなと思っています。明確な夢はあまり決まっていらないのですが、小さい子どもが好きで、幼稚園か小学校の先生がいいな

と思っています。

首藤：私も大学は教育学部に進んで、結構しゃべるのは苦手ですが、こうやってみんなと話をすることをいい機会と思って来ました。

堤：私はキャンパス大使をしていて、キャンパスレポーターもしてみようかと思ったんですね。私も結構人と話すのが苦手で、でも人の考えとか意見とかを聞くのがすごく好きだし、幼稚園とか保育士とかを目指しているの、話を聞いてみたいと思ったので来ました。

~~取材を終えて~~

堤：最初はすごく緊張してたんですけど、先生のお話が自分の興味のある分野だったので、すごく楽しかったです。



佐藤：私も最初は緊張してたんですけど、先生と話す中で知らないことがいっぱいあって、保育所と幼稚園の違いとか、スウェーデンのこととかいっぱい聞けて、今まで自分が知っていた教育の内容が広がったというか、世界が広がったというか、すごく勉強になりました。



首藤：私も、話すのが苦手だから今日すごく緊張してたけど、先生が今、研究されているスウェーデンの教育のこととかたくさん聞けてすごく楽しかったです。

私は、教育でも保育園とかではなくて、特別支援教育のほうに興味があるんですけど、保育園もすごくいいなと思いました。



~~大野准教授からメッセージ~~



保育って、何でもないように見える遊びの中の、先生たちの声かけやかかわり、子どもの見守りなどがとても大事だと思います。たった新聞紙1枚でも子どもが自分で自由にいろいろ発想して

遊ぶことができ、しかも楽しくて、うれしい気持ちになる。

そういう子どもの力もそれを引き出す保育の力も、本当にすごいと思うの。

それをみなさんが面白いと思ってくれるといいなと思います。

今日はありがとうございました。